

# 十二月作品

## 月集スバル



☆今月の四人☆

ただの粒々

奥村 晃 作\*東京

レストラン「ココス」の席に注文の黒糖味のタピオカを待つ  
名にし負うタピオカ旨く飲んだけどまた飲もうとは我は思わぬ  
タピオカの(黒糖ミルクティー)旨いだがタピオカはただの粒々  
タピオカは黒き豆粒スポンジの如き感触噛んで味無し  
頼んでた山椒の木の子な木がなぜか突然枯れてしまった

天球図

福士 りか 青森

十和田湖の湖畔に秋の風たちてスワンボートを洗ふさざ波  
天球図ここに描き進みゆかむ九月の水にパドルをさして

イトムカの入江に木漏れ日のさやか大空のあれはニホンイヌワシ  
空を渡る舟のごとしもカヤックは雲を分けつつ沖へと進む  
例ふれば東京タワーのてつぺんにあるらし深く十和田湖の澄む

コロナと親鸞

橘 芳 関 新潟

コロナ禍の今を厭はず生きむとし親鸞全集日々に読みつぐ  
コロナ禍に小慈小悲もあらぬ身のわれをはかなみ親鸞を読む  
かんとんに他力教へてくれといふかんとんならねば悩めるわれに  
学僧ら書く論考が娑婆世界生きて苦しむ人に届かず

真実信得られぬままに僧辞めてゆらげるままの命生きゐる

ゆららさらら

松尾 祥子 東京

密を避け人の喋らぬ職場にてキャピネをぎぎと引く音のする  
クレームの電話に声を荒げゆく書道講師の若さともしむ  
底紅の木槿咲いては散る庭に明日より今日を思ひてゐたり  
曾祖母と「さいたさいた」を歌ふ子よ小さき脳ちみちのそよぎてあらん  
生家にて九十一の母と住むゆららさららと清く生きたし

☆

☆



高野 公彦 千葉

この世にはこんなやさしい音がある障子が音もなく閉まるおと  
奈良の世にへころくと鳴いて嫌はれし鴉たまつて生ごみあさる  
叱りの刑、屹度叱りの刑ありし江戸の世のこと、危絵のこと  
人間がにんげんとして死ぬのならコロナも増しか戦死の死より  
秋ぞらに群れる羊よ歌詠むは不要不急のことだから詠む

水島 晴子 兵庫

仲 宗角 三重

ときめきて行追ひ読みし論いくつそを書きし人がかたはらにあり  
向き合ひて夫人と食事とるすがたきはやかにして夜のガラスまど  
畏敬もてつつしみをればひとたびを黙礼たまふとほき席より  
つねのごと椅子にしづかにありまじき二旬ののちをこの訃報はも  
藤葉叢あをき見おろす廊のさき表札ひそか彼の知の人の

杜 沢 光一郎 埼玉

森 重 香代子 山口

海を見ながら妻と並びて食べしせぬかあの日のトコロテンの味忘れず  
彼岸明けたる今日やうやくに曼珠沙華の小筆なすさみどりの蕾伸び始む  
彼岸花咲き遅れしはながびける残暑のせみかコロナ禍のせむるか  
色づける公孫樹のひと葉ふた葉散る咲き遅れたる彼岸花を慰むることく  
海を渡りなが旅をする蝶もありコロナ禍に旅程狂ひはせぬか

武 田 弘之 神奈川

日 影 康子 富山

夏来ればおもふ大会に核廃絶署名求めし宮先生を  
唯一の被爆国日本が核廃絶求めぬことが何とも不思議  
レガシーと言ひ得べきもの何かあるアベノミクスかアベノマスクか  
いみじくもみづから言へり「長くいたことより何をしたらが大事」と  
九条を変へざりしことが唯一のレガシーならん安倍政権の

庭石の罅より萩の枝伸びて紅く清らかな花つづり初む  
たちまちに乾く濯ぎ物取り込むとステンレス竿に指を火傷す  
猛暑日の夫の介護によりみがへる百歳まで生きし父の晩年  
邪も不服も言ひしことのなき夫の素直なころいとほし  
朝廷に法師蟬ひと声鳴きて止むいのちの際の声にてありしや



古屋 祥子 群馬

睡りより目醒めに替る午前四時、なにやら浦島太郎の心地

一瞬と思へるに九十年を過ぐと……竜宮城にゐた筈もなく

忘れてはならぬ記憶ぞ戦時下の父母の必死の恩愛の日を

年々に恵まれて拝観を果たしたり 正倉院展の図録十冊

「ホー」長く曳くうぐひすや 暗緑の葉を重ねたる庭の奥より

影山 一男 千葉

伏目がちの藤井聡太の見る未来われも見たしよ十年ののち

けふはもう秋の鯖雲浮かぶ日もコンビニの他行くあてなくて

ガラケーをスマートフォンに変へてより老いがいささか深まつたのか

オンライン講座はできず手書きにて歌を批評す昭和びとわれ

徒党組み尾長が鳴けば孤独なる鴉が啼けり団地の朝は

桑原 正紀 東京

はるかなる記憶のとぼそ開くる声かなかなの声きこゆるゆふべ

かなかなのかなしき声を聴くからにふるさとの見ゆちははの見ゆ

全村をつつみて響むかなかなをせつなしと聴く少年なりき

夏が終はる何かが終はると少年をさびしがらせて響むかなかな

いまわれは生のをはりにちかづきて預言のやうにかなかなを聴く

狩野 一男 東京

暑い日の続く九月は良くあらず秋の扉を抉じ開けてやらう

好きなのは五月だけれど物思ふ秋のはじめの九月も「いいねー」

庭べなる白さるすべり見事なり九月下旬をまつしろうく咲く

兄二人二十四、六十八で死に六十九を我は生きゆく

十月になれば一歳年を取りイイネまたまた姉さん女房

宮里 信輝 神奈川

圏史道・中央道行き「駒ヶ根」で降りて中央アルプス山歩

中央アルプス主峰なる「木曾駒ヶ岳」の空に触れをり頂に付ち

二十代逝かせぬ日本のでつぺんの富士山頂の碧落到に触れ

いつぼんの楠の壮樹が屋根おほひ老女がひとり住む家を呑む

大木になり家を呑みさうなので惜しみて伐つた桜も枇杷も

岡崎 康行 新潟

手を合はす人のところは知らざれど忠魂碑のまはり草刈られゆく

草を刈る若きころは碑のまはり荒らしておくど怖いからと言ふ

忠魂碑の草刈る音の絶えしころしんがりのカラスらねぐらへ帰る

家々に点るあかりは夜の更けて一戸にひとつあるいはゼロ

若きわれのワルさ知るものがあらずなりてわたくしはいつたい何者なのか

小島 ゆかり 東京

夕蟬のこゑある空のみづあかね小舟いくつもとほざかりゆく

べつに悲しくはないです大音響テレビの部屋で母ねむるとも

ひつそりとわが影過ぎて白昼の路上とかげは舌を繰り出す

ビルの間まの雨のよぞらに花火あがり九月のしろいけむり濡れたり

母がもう忘れたるわが誕生日 未生以前の秋のかぜふく

木 畑 紀 子 京 都

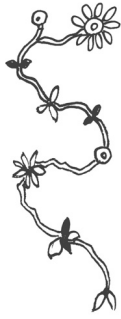
這ふ、絡む剛とぎいきのちもすがれそめ季にしたがふ野辺の草たち  
めぐる月ながるる雲のかたみなる白ふれあはずゆふぞらにゐる  
真夜を鳴く虫の音動しひらがなの八木重吉の詩うたをおもへり  
しなふ葉にのるあさつゆのひとつぶのまろきころの一日であれ  
秋の野にゑのころぐさの穂がたわみわれはおもひでの壺に傾げる

島 田 暉 神奈川

焼夷弾の炎の熱気にあぶられて突如燃え出す髪やモンペや  
右ひだり燃え狂ひたる炎の中焦げし子背負ひ逃げまどふ母  
リヤカーに鍋釜を載せ逃げ廻り爆風浴びて母子は火達磨  
たてがみに火のつきし馬人に混り炎蹴破り猛り逃げくる  
見わたせば家も花木も焼け失せたり黒き帝都の夏の夕暮れ

大 松 達 知 \* 東 京

ゆうぐれの空を見ており出て行った猫が戻ってきたような空  
甘やかにわれの時間のゴンドラを揺らして都つよ農のキャンベル・アーリー  
許すとは心で許すことなりや心が許すことなりや咩  
生徒らの検温表にてんでんの心のように平熱ちがう  
人骨の、六万年前の人骨のまわりに花粉があつたそのこと



田 宮 朋 子 新 潟

「シルクロード」のアーカイブスを見ておもふ今の新疆ウイグル自治区  
名にし負ふ人民共和国がなぜかくも人民抑圧するか  
香港といふかぐはしき街を呑む帝国主義的共産政権  
民心を潰す強権おそるべしいまも特高、憲兵をらむ  
餓える人見て見ぬふりをするわれか身を削るほどの額は寄付せず

津 金 規 雄 神奈川

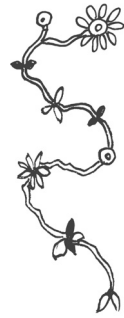
いちにんの少年棋士より起こりたるうねりは覆ふコロナの日本を  
四タテで初タイトルを奪はれし木村王位の名を忘るまじ  
真つ昼間ワイドショーにてなんとんと大盤将棋の解説すすむ  
囲碁は(打つ)将棋は(指す)といふなれど駒台の駒は(打つ)といふなり  
鬱病より復活したる棋士ありてその闘病記立ち読みをする

小 山 富 紀 子 京 都

玄関を入りし所に(マスク掛け)定番とならむ日本の家屋  
手を洗ふウォッシュユハンド手を洗ふウォッシュユウォッシュ指紋が消ゆる  
雷公の意に従はず雨雲は叡山越えて近江かたの方へ  
これなるはまさに昭和のわたほこり模様変へむと箆筒退ければ  
掃除機でブオンと吸ふははばかられそつと掃き寄す昭和のほこり

清 水 正 子 神奈川

朝顔がしばんでしまふまへに起き散歩たのしまむ坂多けれど  
朝顔の一夏の花の数おもふウイズコロナの日々のなぐさめ  
画像なる(宇宙アサガオ)まだ蕾咲かばさながらブラックホール  
夢みるやアンフォラ型のびんに透けブランドー漬けの青梅ねむる  
雷雨すぎて水形代のやうな雲ながれゆきたり コロナ鎮まれ



小嶋 一郎 佐賀

序でにと植ゑしあぢさゝる五年経てここぞと庭の一角を占む  
降りさうで降らぬいち日持て余す遅き昼飯喰ひてそののち  
マヨネーズ、ソースが並ぶ食卓に七味唐辛子あれば落ち着く  
マリーンズに今夜も勝てぬホークスを見届けて寝る舌打をして  
蔓草は時計廻りと反対に絡むをリ、ケ、ジ、ョの孫に教はる

後藤 美子 北海道

雨雲の隙に見えたる青空が狭まりしづかな雨となりたり  
柔の実の熟れたる色のへどどめ色 栃木群馬に今も使はる  
読みてたのし顔料(セビ)は烏賊墨を加工して人がつくりたる色  
八月尽朱夏逝き明日より白秋に時とどまらずコロナ禍止まず  
よきことの来れとねがふ残る日々三分の一と今年を思へば

藤野 早苗 福岡

女ざかりをはるかに過ぎて秋衣川越唐棣襪浅に着る  
デパ地下の松茸かかとの角化症 どこにでもある秋の入り口  
たらちねに三月娘に七カ月会はざる日々ようすずみの日々  
無事なるを知りつつ眉根寄せにけりセイタカアワタチソウ過ぎるとき  
固茹でを待つ十五分おほざらに竜の鱗の生まれて溶けて

風間 博夫 千葉

雨の日のけやき並木は雨だれの音、差す傘を打つ雨の音  
人生に出生、死亡届ありあれどみづからでさざる届  
何メートルなのかソーシャルディスタンス、二メートルとふ手が繋げない  
令和二年九月曇り日真昼間のマスクをせざる人ぬ車内  
停車して五分、特急が追ひ抜いて二分、急行が追ひ抜いてゆく

田中 愛子 埼玉

すずやかに赤信号を渡りたり人影のなき秋のひきあけ  
まひるまの電車で瞬時まどふなりとびとびに空く座席を前に  
ウィルスのせみではなくて(時)のせみタピオカ店に行列のなし  
着用のマスクを顎にずらしる人の多しも午後の会議に  
いつしらに盛り塩の消ゆ駅裏の間口のせまき小料理屋より

水上 比呂美 東京

果樹園の葡萄の実よりこぼる陽黄金いろの大き手が受く  
両の手を下げて小雨の細道にはだして立ちあゐるやうな木蓮  
木芙蓉は一日花の白き花咲かせ今年の秋を浄化す  
漂白剤を入れても落ちぬ青き染み洗濯槽をのぞく真夜中  
十月の雨が天より降りてきて収穫あとの果樹園ぬらす

鈴木 竹志 愛知

「復興五輪」唱へし人は職を辞し東北はまた置き去りとなる  
政治家が掲げし「復興五輪」の旗今ぞ虚しく下ろされゆかむ  
むざむざと「復興五輪」の旗下ろされて政治家たちに矜持はあるか  
復興相派閣人事で決められて福島はまた置き去りの秋  
汚染されし土の処分が目途立たず復興はなほはるかに遠し

原賀 環子 東京

ほふし蟬鳴く昼さがりファックス来 声のとほしきコロナの夏に  
日単位に始まるコロナウイルスの年単位ほど怖きものなし  
自づからまあるく包む掌となりぬ空蟬をひろひ、もち帰るとき  
ラフカディオ・ハーン小泉八雲はも怪談といふ異界に棲まふ  
ましづかな声で八雲を語りたる岩崎佑太どうしてゐるか

水上 芙季 東京

かつて見たやうな気がせりタイトルが(新たな日常)といふシニールな絵画  
人間が近づいていくA Iに(非対面型サービス)など推し  
病院の隅に扇風機突つ立つて どうしよう家の弱つたタニシ  
まつさらな判定Aはもうあらず例へば「副牌」などと書かれて  
トンネルを抜けるとにはか窓につく並み縫ひの糸の雨の水滴

大野 英子 福岡

メイサーク去りてただいま北上中、中四日とは早すぎないか  
台風の備へのために帰らねばがたびし軋んでわれ待つ実家  
来るぞ来るぞと木々ゆらし雲疾く過ぎる海神ハイシレンのこゑ低く近づく  
静寂がもどる朝九時あけ放つ窓をめぐけて来るふきかへし  
虫の音を聴きつつ眠りうつかりと風邪ひきさうな秋が来てるる



桑原正紀歌集 令和元年9月刊 一六〇〇円(税別) 送料三〇〇円

秋夜吟 コスモス叢書第1166篇 青磁社

著者住所 〒173-0037 東京都板橋区小茂根三一九-八一〇六

福岡市文学賞受賞

大野英子歌集 令和元年9月刊 一三〇〇円(税別) 送料三〇〇円

甘藍の扉 コスモス叢書第1159篇 柘書房

著者住所 〒812-0028 福岡県福岡市博多区須崎町三六一三〇二

島田暉歌集 令和元年9月刊 一六〇〇円(税別) 送料三〇〇円

記憶の炎 コスモス叢書第1162篇 角川書店

著者住所 〒246-0015 横浜市瀬谷区本郷一-一四一六

水上比呂美歌集 令和2年9月刊 二三〇〇円(税別) 送料三〇〇円

青曼珠沙華 コスモス叢書第1177篇 柘書房

著者住所 〒182-0034 東京都調布市下石原二-二四-四三